

【一】次の文章を読み、後の問に答えなさい。

2016年4月、驚くべきニュースが伝えられました。17世紀のオランダの画家、レンブラントが新作を発表したというのです。もちろん、レンブラント自身が描いた作品ではなく、人工知能がレンブラントの作風を学習して、あなたもレンブラントが描いたように、作品を作り上げたのです。

言うまでもなく、これはレンブラントの絵画の模倣、すなわち贋作ではありません。

むしろ、まったく新しい絵画。レンブラントの作風を忠実に再現しているのです。

「新作」を描くために、レンブラントの全作品が、色使いやレイアウト、さらには絵の具の凹凸おうとつにデータ化されたそうです。それを、人工知能が※ディープ・ラーニングによって学習し、最終的には3Dプリンターを使って、立体的に描き出したのです。まさに、レンブラントが現代に復活したように見えるでしょう。

こうして、人工知能がいったんレンブラントの作風を学んでしまえば、あとはレンブラントになり代わって、作品を完成させることができます。今まで、芸術作品を創造できるのは、人間だけだと見なされてきました。ところが、この①想定が維持できなくなり始めたのです。人間だけでなく、人工知能もまた、芸術作品を創造できるのではないのでしょうか。

これに対して、おそらく即座に反論が提出されるかもしれません。曰く——これはあくまでも、レンブラントの作風を忠実に模倣しただけであって、芸術作品を創造したわけではない。あるいは、1人の芸術家のエピソード※を生み出すことができても、1人の独創的な芸術家を生み出すことはできない——という具合に。

つまり、レンブラント風人工知能や、ゴッホ風人工知能、ピカソ風人工知能は作り出すことができても、まだ見ぬ独創的な芸術家II人工知能を作り出すことはできない、というわけです。しよせん人工知能は模倣するだけであって、そ

の技術がどんなに向上しても、新たな創造は不可能だ、と力説されるでしょう。しかし、こうした発想はきわめて偏見^③に満ちた考えではないでしょうか。

フランスの構造主義哲学者罗兰・バルトは、かつて文学作品を分析しながら、「オリジナリティに満ちた作者」という考えを批判したことがあります。彼によると、「作者が他の人とは違ったオリジナルな思いを表現した作品」という考えは、じつを言えば近代特有の「カンネンにすぎません」。

そこで彼は、そうした「近代的な作者」の死を宣言して、作品の新たな捉え方をテイショウするのです。

テキストとは、さまざまの、オリジナルではない、書かれたものが混じり合い、ぶつかり合う多次元空間であって、(中略)文化の数知れない分野からとられた引用を織ってできた織物である。

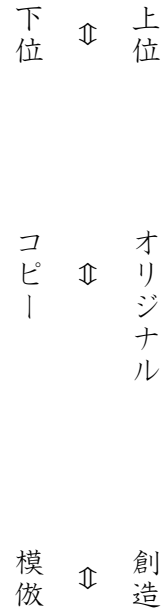
(『物語の構造分析』)

ここで「テキスト」と呼ばれているものを、文学作品だけに限定せず、あらゆる芸術作品にまで広げることにしてしまおう。すると、芸術作品もまた、「オリジナルではない、文化の数知れない分野から織り合わされた多次元空間」と言えます。

しかし、これによって、何がわかるのでしょうか。

一般に、オリジナルとコピー、あるいは創造と模倣はまったく対立したものだと思われています。そのとき、オリジナルや創造が評価され、コピーや模倣は軽視されがちです。早い話、「オリジナルはよく、コピーは悪い」と繰返して主張されるのです。これを「オリジナル信仰」と呼ぶことにしましょう。

オリジナル信仰



しかし、はたしてオリジナルとコピーを、それほどはっきりと分断オできるのでしょうか。創造と模倣の区別は、簡単にできるのでしょうか。たとえば、小林秀雄は『モオツァルト』のなかで、次のように述べています。

模倣は独創の母である。唯一ゆいいつほんとうの母親である。二人を引離ひきはなしてしまったのは、ほんの近代の趣味しゆみに過ぎない。模倣してみないで、どうして模倣出来ぬものに出会えようか。

(『モオツァルト』)

いかなる芸術家も、最初から独創的な作品を生み出したわけではありません。その前に、他の人々の作品を模倣し、よく言えば作風を取り入れ、悪く言えば盗み出すぬすのです。先立つ人、同時代の人からまったく影響えいきやうなしで、ただ一人で作品を生み出すことはできません。まったく隔絶かくせつされていれば、おそらく誰だれからも評価されないのでしょう。だとすれば、人間のみが独創性をもち、人工知能は模倣しかできないと考え、人間と人工知能を分断するような近代的な発想は、そろそろ限界がきているのではないのでしょうか。

そもそも、独創性を考えるとき、すべての要素で他とはまったく異なっている、と見なすことはできません。大部分の要素が他と同じでも、いくつかの要素で違っていけば、独創的になります。あるいは要素は同じでも、その組み

合わせを変えていけば、独創的になるのです。

そうであれば、人工知能の場合でも、言ってよければ、独創性をいくらでも発揮できるのではないのでしょうか。データの一部の要素を他と置き換えたり、要素の組み合わせを変えてみたりすれば、従来とは違ったものが出来るでしょう。レンブラントの作風をすべて忠実に再現することもできれば、一部を変えたり組み合わせを変えたりしながら、[※]ポスト・レンブラント風の絵画も作り出せるわけです。

問題は、^{へんこう}そうした変更がどう評価されるか、ということになります。改悪とされ、批判されるかもしれませんが、もしかしたら^{ざんしん}斬新と^{ねつきよう}いって熱狂的に^{むか}迎え入れられるかもしれません。ただ、いずれであっても、これは人工知能だけのあり方ではなく、人間が創作した場合にも同様です。

たとえば、芸術史上もつとも独創的だと見なされるピカソの場合を考えてみましょう。個人的にピカソのよさがわかるかどうかは別にして、一般的にはピカソが^④たぐいまれな独創的天才であることは、認められています。ところが、ピカソ研究者の中には、「ピカソには独創性がない」と主張する人もいるのです。これをうけて、『ピカソ[※]剽窃の論理』^{たかしなしゅうじ}（高階 秀爾）では、次のように述べられています。

すでに見た個々の場合の事例をまとめて考察してみて、われわれはそこに^一ふたつの際立った^{とくちよう}特徴を指摘^{してき}することができる。第一は、われわれのいわゆる「剽窃」という現象が、ピカソの場合際立^{きわだ}って多いこと、しかもそれが^二重要な作品に多いことであり、第二は、その「剽窃」のやり方が、^{しきさい}色彩よりはむしろ形態に、形態よりは^三構図に、^四はっきりと認められることである。

こうした表現は、決してピカソの芸術を貶めて^{おとし}いるわけではありません。むしろ、今まで「独創性」と見なされてきたものが、いかに模倣と密接にかかわっているかを明らかにするものです。単に忠実に模倣するだけでなく、その要素や組み合わせを大胆^{だいたん}に変換^{へんかん}し、従来とは違う^⑤作品を作り上げるわけです。

芸術の独創性をこのように理解できるならば、人工知能にも独創的な作品を生み出すことができるはず^⑤です。レンブラント風の絵画は、人工知能の修学時代であり、熱心に模倣する段階といえます。そこから、次に要素や組み合わせを変換しながら、独創的な作品が生み出されていくでしょう。

しかしながら、人間と人工知能をなんとしても対立させたい人であれば、「こうして作られた作品は、芸術ではない、なぜならそこには感情がないからだ」と主張するかもしれません。

(岡本裕一郎『人工知能に哲学を教えたら』より)

問題の都合上、本文を一部変更しました。

- ※ 贋作 — にせもの ※ ディープ・ラーニング — コンピューターが物事を理解するための新しい学習方法
- ※ エピゴーネン — まねるだけで、独創性がないこと。
- ※ ポスト — ほかの語の上に付いて、「それ以後」「その次」の意味を表す。
- ※ 剽竊 — 他人の作品を自分のものとして発表すること

★ 問題の中で指定する字数には、句読点、かつこ類をふくみます。

問 一 — 線部ア～オのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二——線部①「この想定」とは、どのようなものですか。「という想定」につながる形で本文中から二十字以内でぬき出し、最初と最後の四字を答えなさい。

問三——線部②「反論」とは、どのような反論ですか。本文中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

問四——線部③「偏見に満ちた考え」とありますが、筆者がここで「偏見」であると指摘してきするのはなぜですか。適切なものを次のア〜カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「模倣と創造は別物だ」という考えが前提になっているから。

イ 芸術家の独創性と人工知能の独創性には大きな差が認められないから。

ウ 芸術家が心血を注ぎ製作した芸術作品を無許可でコピーするのは違法行為いほうこういだから。

エ コピーはオリジナルより下位に置かれ、創造は悪だという印象が根付いているから。

オ 模倣とはあらゆる文化を統合する行為だと「近代的な作者」によって証明されているから。

カ 「近代的な作者」の死が宣言され、コピーがオリジナルより上位に位置することになったから。

問五——線部④「たぐいまれな」の意味として正しいものを次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 堂々としており、周りと比べて目立つさま。

イ そっくりで、比べても違いのわからないさま。

ウ 見ただけですぐに違いがわかり、判断しやすいさま。

エ なかなか同じようなものがなく、並ぶものがないさま。

問六

Ⅰ Ⅱ
に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | Ⅰ | ただちに | Ⅱ | きわめて | Ⅲ | むしろ | Ⅳ | いっそう |
| イ | Ⅰ | いわゆる | Ⅱ | いっそう | Ⅲ | やがて | Ⅳ | ようやく |
| ウ | Ⅰ | ようやく | Ⅱ | ただちに | Ⅲ | いわゆる | Ⅳ | きわめて |
| エ | Ⅰ | いっそう | Ⅱ | むしろ | Ⅲ | ただちに | Ⅳ | ようやく |

問七

——線部⑤「人工知能にも独創的な作品を生み出すことができますはずです」とありますが、なぜそのようなことが言えるのですか。その理由として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 独創的な作品は、模倣が基本であり、人工知能が様々なデータを習得することで、過去の芸術家と全く同じものを生み出すことができるから。

イ 独創的な作品は模倣と密接にかかわっており、人工知能が世の中にある要素や組み合わせを学習して変換することで、新たな作品を生み出すことができるから。

ウ 真に独創的な作品などは人間でもなかなか生み出すことはできず、人工知能であっても多少のオリジナリティをもった作品であれば生み出すことができるから。

エ 真の独創的な作品というものなどこの世に存在せず、すべての作品は誰かの模倣に過ぎないため、人工知能にも昔の芸術家の作風をインプットすれば生み出すことができるから。

問八

人工知能が芸術作品を創り出すことについて、あなたはどうか考えますか。理由とともに書きなさい。

問 九 この文章を読んだ後、クラスで話し合いをしました。 a d に入るセリフとして最も適切なものを

次のア～コからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

生徒 A 人工智能が、新たな芸術作品を創り出すことは、やはり不可能なんじゃないかしら。

生徒 B そうだよね。 a は、人間にしかできないよね。

生徒 C でも、この文章によると人間も作品を創り出す際には b と書いてあるよ。

生徒 D 人間もそうなら、人工智能もいずれ新たな芸術作品を創り出せると思うな。

生徒 B そうかなあ。どんなに真似する技術が高くて、人間のような感情がないから、どうしても劣る気がするわ。

生徒 C でも、それだけ c が目覚ましいってことだね。

生徒 A 新しい技術が導入されたときには、正確な知識が必要ね。

生徒 D あとは、 d は、これからの将来、慎重に考えていかなければならないよね。

生徒 C たしかに、コンビニやスーパーのレジなどの無人レジなど、人工智能が活躍する場面が増えているよね。

ア なるべく似ないようにしている イ 新たなものを創造すること

ウ 人類の退化 エ どの仕事を人間がやり、どの仕事を人工智能にやらせるのか

オ 模写している カ 今後の日本のために人工智能を撲滅すべきかどうか

キ 模倣している ク どうやって人工智能に勝る技術を人間が身に付けていくのか

ケ 人工智能をつくりだすこと コ 人工智能の進歩

問題は次のページに続きます。

【二】次の文章を読み、後の問に答えなさい。

めでたく志望大学に合格した新入生は、喜びをかみしめる一方ですみやかにふたつのことに着手しなければならぬ。^①

第一に、入学金をはらいこむ。璃子の場合、これは母親の手によってどこおりなくなされた。第二に、住まいを確保する。こちらは入学金と違^{ちが}って、新入生全員にあてはまるわけではない。実家が大学に近ければ、必要ない。ややこしいのは、どの程度の距離なら通学が可能な^{きょり}のか、個人によって、もしくは親と子によって、感覚が異なることだ。とりわけ、自宅の玄関^{げんかん}から大学の校門まで一時間半と少し、という中途半端な距離だと、意見が分かれやすい。

大学のそばでひとり暮らしをしたいと切り出した璃子は、父親の猛反対^{もうはんたい}に遭^あった。

「通えるじゃないか。大阪と京都は隣^{となり}どうしだぞ」

「隣^{となり}っていつでも、往復三時間以上もかかるんだよ」

「お父さんだって独身の頃^{ころ}は、茨城^{いばらき}から東京まで片道二時間かけて通勤してた」

「だけど一限の授業は八時半からだよ。早くない？ 七時前には家を出ないよ」

「お父さんも毎朝そのくらいの時間には出てるよ。そうだ、ふたりで一緒^{いっしょ}に駅まで歩けるな！」

璃子は唇^{くちびる}をかんだ。すんなり認めてくれるとは思っていなかったけれど、予想以上にかたくなだ。

「それに、璃子がひとり住むなんて心配だよ。物騒^{ぶつそう}な世の中なんだから。璃子になにかあったら、お父さんはどうしたらいいか……」

父親にとって、時間よりなによりそれが最大の問題であることは、疑う余地がなかった。論理的な議論ならまだし

も、感情論に持ちこまれては分が悪い。璃子は援軍えんぐんを求めることにした。

「ねえ、お母さんはどう思う？」

A

こういうとき、母親はおおむね中立派てつに徹する。

B

C

D

「璃子も二、三回行ったただけだろう。はじめは遠く感じてても、毎日ならじきに慣れる。やってみないとわからないよ」
どちらの意見も一理ある。やってみなければ、わからない。わかっていない者どうしがいくら言い争っても、どちらが明かない。

「そうだ」

母親がぱちんと手を打った。

④ 「先生に意見を聞いてみない？」

「先生？」

父親が聞き返した。

「ほら、安藤先生あんどう。家庭教師の」

一年近く、ほぼ毎週にわたって、大学の一画に建つ寮りょうから上原家まで足を運んできた当事者である。適任だろう、と父娘おやことも納得した。

実際に電話をかけたのは、璃子本人ではなく母親だった。より客観的な判断をおおぐためには、そのほうがいと

判断したのだ。それから、これも公平を期すべく、父娘でもめているという背景は知らされなかった。

「璃子を自宅から通わせるか、京都でひとり暮らしをさせるか、迷ってるんです」と、母親は簡潔に切り出した。

「できれば⑤大学の近くに住んだほうがいいと思います」

回答も、負けず劣らず簡潔だった。

さらに細かいホソクも続いた。往復三時間を超える移動は、土曜日の昼間でさえ大変だったのだから、平日のラッシュ時や夜遅くはもっと苦痛だろう。また、専門科目の授業が多くなってからは、始発や終電の時間にかまってもいられない。思わしい実験結果が得られず、研究室に夜どおしこもりつきりになったり、教授の都合に合わせて授業前の早朝に呼び出されたりもする。大学の周りには学生も多く、ベンリで住みやすい。

「それに、楽しいですよ」

「楽しい、ですか……」

璃子の母親は考えこむようにしばし黙った。

「ありがとうございます。先生のご意見も参考にして、家族でもう一度話しあってみます」

そんなやりとりをへて、璃子の新居は女子学生専用のこぢんまりとしたアパートに決まった。

東大路通と北大路通のまじわる高野の交差点からひと筋西へ入った路地に建ち、農学部のある北部キャンパスまで歩いて十五分、一般教養の授業が行われる中央キャンパスや南部キャンパスにも二十分程度で着く。自転車なら、その三分の一ほどの時間しかかからない。

引越しの日、家を出る娘を、父親は長い訓辞とともに送り出した。その後、引越し会社のトラックが実家にやってきて、母親の指示のもとで荷物を積みこみ、アパートまで運んだ。走り去るトラックを見送って、父親は涙ぐん

でいたそうだ。

「そんなに遠くないもの。こっちにもときどき顔を出すって言ってたじゃない」

傷心の夫を妻は慰めた。

「卒業したらまた帰ってくるかもしれないし」

⑥ 前者は実現したが、後者はしていない。十八歳で実家を離れて以来、璃子が両親と暮らす機会は一度も訪れていない。

学生生活がはじまり、璃子がまず驚いたのは、男子しかない教室だった。

農学部は学科ごとにクラスが編成される。璃子の所属する農学科は、総勢五十人ほどの一クラスにまとめられ、そのうち女子はただひとりだった。高校三年間を女子校で過ごした身に、女子一〇〇パーセントから二パーセントへの急変は大きい。女子トイレも女性教員も、九八パーセント減とまではいかないまでも、やはりそうとう少ない。

※ 必修科目の授業はクラス単位で受講する。中でも体育の時間には、**X** 孤独を感じた。どのグラウンドにも女子更衣室などない。高校のときにもなかったけれど、それは全員が同じ教室で着替えるから必要なかったのだった。しかし大学では、薄暗くかび臭い体育倉庫の中で、ひとりぼっちでござと着替えなければならぬ。男子たちは外のベンチで適当にやっている。なにやらふざけあっている声が窓越しに届くたび、璃子は切なくなった。

クラスメイトから無視されているわけではない。教室で目が合ったとき、構内ですれ違ったとき、挨拶がわりに微笑んでみれば、向こうもぎこちなく会釈を返してくれる。でも、進んで話しかけてきてはくれない。かといって、璃子のほうから誰かひとりに声をかけるのも、気がひけた。璃子だって、もし四十九人の女子の中にひとり**Y** 男子がまじっていたら、おいそれとは近づけない。それでも気負わず異性に話しかけることができるのは、活発で社交

的な、あるいは世話好きで面倒見のいい、たとえば果菜みたいな子だ。璃子のクラスには、残念ながらそういう性格の男子はいなかった。ちなみに、なにも農学科だけが特別だったわけではない。この大学の、少なくとも理系の学部では、^⑦どこも似たような状況^{じょうきょう}だった。

必修科目の他に、選択^{せんたく}制の科目、いわゆる一般教養の授業もあった。これらは学部や学科には関係なく受けるので、女子もいる。四月中に興味のある科目を見て回り、五月の初旬^{しよじゆん}に正式な履修登録^{りしりゆう}をすることになっていた。

ただこれも残念ながら、たまたまなのか、はたまた璃子の嗜好^{しこう}と一般的な女子学生のそれがずれているのか、璃子が足を運んだ教室はたいがい男子学生が大半を占^しめていた。**Z** まじっている女子も、すでにふたりや三人ずつ固まって座り、仲がよさそうに話したり笑ったりしている。彼女^{かのじよ}たちの周りだけが陽だまりのようにまぶしくて、割りこみづらかった。

ひとりで構内を歩いていると、ひっきりなしにサークルや部活動の勧誘^{かんゆう}を受けた。歓迎コンパだの花見だの説明会だの、毎日のようになにかが開かれていますようだった。そういう催^{もよお}しに参加すれば顔見知りもできるのだろうとは思いながらも、飛びこむ勇氣はなかなか出なかった。この季節の構内は、まるで祭か戦場だ。獲物^{えもの}をねらう肉食^{にくしょく}獣^{じゆう}のごとく目をぎらつかせ、声を張りあげ、強引にチラシを押しつけてくる上回生たちの勢いには、璃子のように内気な子でなくともしりごみするだろう。

四月も半ばを過ぎて、璃子^⑧はだんだんあせりはじめた。果菜のような男子がいらないということは、わたし自身が果菜のような女子をめざすしかないのだろうか。でも、どうやって。

(瀧羽麻子『左京区桃栗坂上ル』より)

※ 専門科目 — 大学の授業は、自分の研究分野に関わる「専門科目」と、専門以外の分野を学ぶ「一般教養」とに分けられる。
必修科目 — 全員が受けなければならない科目。一方、自分でどれを受けるか選ぶことができる「選択科目」もある。

果菜 — 璃子の高校時代の同級生。

履修登録 — 自分がどの授業を選択するかを大学に登録すること。

歓迎コンパ — 上級生が新入生を歓迎して開く親睦会しんぼくかいのこと。

上回生 — 上級生のこと。

★ 問題の中で指定する字数には、句読点、かつこ類をふくみます。

問 一 — 線部ア↘オの漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問 二 — 線部①「ふたつのこと」とありますが、これは何と何を指していますか。それぞれ「こと」につながる形で、九字以内でぬき出しなさい。

問 三 — 線部②「父親の猛反対」とありますが、その一番の理由はどのようなことだと璃子は考えていますか。最も適切なものを次のア↘エから選び、記号で答えなさい。

ア ひとり暮らしをして、娘が危険な目に遭ってしまう可能性があること。

イ ひとり暮らしをすることで、家賃や生活費などの経済的な負担がかかること。

ウ 娘が朝早く家を出ることになれば、一緒に駅まで歩いて親子の会話が増えること。

エ 通学に片道一時間半くらいかかることは、大人から見れば大して不便ではないこと。

問 四 — 線部③「璃子は唇をかんだ」とありますが、このときの璃子の気持ちとして最も適切なものを次のア〜

エから選び、記号で答えなさい。

ア なかなか自分の考えを父親に理解してもらえず、おどろいている。

イ 父親が思っていた以上に心配してくれて、照れくさく感じている。

ウ 一人暮らしを父親に認めてもらうための作戦を、必死に考えている。

エ 自分の希望を父親に聞き入れてもらえず、いらだちをこらえている。

問 五

A

D

に当てはまる会話文を次のア〜エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 必要あるよ

イ いや、ないな

ウ 必要があるなら京都に住めばいいし、ないなら家にいなさい

エ お父さんはここからあの大学に行ったことがないから、どんなに大変かわかってないんだって。何度も乗り換えて、最後は歩くんだよ

問 六

— 線部④「先生に意見を聞いてみない？」と母親が提案したのはなぜですか。次の□に当てはまる表現を本文中からぬき出し、最初と最後の四字を答えなさい。

安藤先生は

□から。

問 七

— 線部⑤「大学の近くに住んだほうがいい」と先生が言う理由としてふさわしくないものを次のア〜エか

ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大学の周りの生活環境が良いものだから。

イ 大学と家との移動時間が長いのは苦痛だから。

ウ ひとり暮らしをすることは楽しいことばかりだから。

エ 早い時間に呼び出されることや、遅くまで大学に残らなければならないことがあるから。

問 八 — 線部⑥「前者」の内容を十五字程度で説明しなさい。

問 九 X Z に当てはまる言葉を次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ひときわ イ ぼつんと ウ しっかり エ ふらふらと オ ちらほらと

問 十 — 線部⑦「どこも似たような状況だった」とはどのようなことですか。最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 必修科目だけでなく一般教養の科目も、男子の人数が大半であったということ。

イ 気負わず異性に話しかけられるような男子は、この大学にはいないということ。

ウ どの理系の学部も、クラスの大半が男子で、女子がごくわずかしいということ。

エ グラウンドに女子更衣室がなく、女子は肩身のせまい思いをしなければならないということ。

問 十一 — 線部⑧「璃子はだんだんあせりはじめた」とありますが、このときの璃子の気持ちを本文中の言葉を使って八十字以内で説明しなさい。

受験番号

氏名

得点

【一】 問 一

ア

イ

ウ

エ

オ

問 二

ㄱ

という想定

問 三

40 20

問 四

.

.

問 五

.

問 六

.

問 七

.

問 八

問 九

a

b

c

d

【二】 問 一

ア

イ

ウ

エ

オ

問 二

こと

こと

こと

問 三

.

問 四

.

問 五

A

B

C

D

問 六

安藤先生は

から。

問 七

.

問 八

15

問 九

X

Y

Z

問 十

.

問 十一

80 60 40 20